

秋も深まってまいりました。早いもので、今年は2年に一度の常任委員選挙の年となります。投票用紙の御返送、何卒ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。Joycean Japan への投稿、次回大会の研究発表も募集しております。

震災後は、日本の文学研究者たちにも、海外から様々な声が寄せられているようです。今回のコラムには、先日の京都でのIASILをはじめ、いくつかの学会に関する情報を寄せて頂きました。

Topics

- 常任委員選挙のご案内
- Joycean Japan 第23号 投稿のご案内
- 第24回大会 研究発表者募集のお知らせ
- コラム：東日本大震災と東アジアのジョイス研究動向（伊東 栄志郎）

常任委員選挙のご案内

- ◆ 下記抜粋の会則に基づき、来年（2012年）6月の総会では、2年任期の新・常任委員が選出されます。事務局ではその候補者を現・常任委員会に推薦いたします。推薦にあたり事務局は、全会員による選挙を行い、上位得票者若干名を選出いたします。
- ◆ 常任委員は「若干名」となっておりますが、現在9名で運営しております。次期の人数は決定しておりませんが、今回の選挙では、例年通り9名に投票をお願いいたします。
- ◆ 同封の投票用紙名簿の左欄に、9名を上限として、○をおつけください。
- ◆ 投票用紙名簿は、同封の事務局宛封筒に入れ御投函ください。（御住所・御氏名は無記載で結構です。）
- ◆ 選挙期間は、本ニューズレター到着日より11月19日（月）までとさせていただきますので、どうぞよろしく御協力ください。（11月19日消印有効）

日本ジェイムズ・ジョイス協会会則（抜粋）

（役員）

第6条 この会に次の役員及び会計監査を置く。

会長1名 常任委員若干名 事務局長1名 会計監査2名

第7条 会長、常任委員及び会計監査は総会において選出し、事務局長は常任委員の中から会長が指名し、会計の任にあたる。

第8条 会長はこの会を代表し、常任委員会を召集し、常任委員会の運営にあたる。常任委員会はこの会の活動の立案・組織・運営・および機関誌の編集にあたる。

第9条 役員及び会計監査の任期は2年とする。ただし再任を妨げない。

なお、現在の常任委員は以下の9名の方々です。

浅井学、吉川信、清水重夫、須川いずみ、道木一弘、戸田勉、夏目博明、結城英雄、若島正

Joycean Japan 第23号 投稿の御案内

例年通り、査読対象論文の投稿締め切りは11月30日(消印有効)となっております。第23回大会で口頭発表された方々はもちろんのことながら、それ以外の会員からの投稿も受け付けております。

論文投稿規程

1. 投稿資格は、会費を納入している会員が有する。
2. 字数・書式。日本語の場合、14,000字以内(タイトル・註などを含む)。英語の場合、半角で28,000ストローク以内(タイトル・註などを含む)。双方とも、半角で2,400ストローク以内の英文サマリーを添付のこと。書式は、『MLA 英語論文の手引き』(北星堂)の最新版に基づくことを原則とする。
3. 11月末日までに、事務局に郵送すること(当日消印有効)。添付ファイルによる提出は認めない。なお、デジタル情報を同時に提出する必要はないが、採用された論文については、後日提出が求められる。
4. 著者校正は初校のみとする。

なお、第23回大会の「シンポジウム」で発表されたみなさんの報告原稿は、原則2月末日(消印有効)を締め切りとさせていただきます。それぞれのオーガナイザーには、原稿の取り纏めをお願いいたします。(ご質問は事務局までお願いします。)また、第22回大会の総会において、「Joycean Japan 掲載物の著作権は、日本ジェイムズ・ジョイス協会に属する」ことが決定されました。

第24回 日本ジェイムズ・ジョイス協会 研究大会

研究発表者募集のお知らせ

第24回研究大会は、2012年6月16日(土曜)、専修大学(神田キャンパス)で行われます。

会場・プログラムの詳細は4月のNewsletterでお知らせしますが、(1)研究発表、(2)シンポジウムI、(3)シンポジウムII、となる予定です。

については、(1)の研究発表者を募集いたします。

発表を希望される会員は、800字程度の発表要旨を添付のうえ、12月末日までに事務局へお送りください。E-mailでのお申込みも受け付けております。

発表時間は20~25分、質疑応答は10~15分程度を予定しております。

お送り頂いた発表要旨は、2012年1月上旬に行われる常任委員会での査読を経て、採用が決定されます。(司会者もこの常任委員会で確定します。)要旨査読通過者は、5月中に、司会者宛て発表原稿をお送りください。

応募者の方への詳細は追って御連絡いたします。

東日本大震災と東アジアのジョイス研究動向

伊東 栄志郎

書簡集でも確認出来るが、ジョイスは「地震」という日本語を使っており (LI, 243)、「地震、雷、火事、親父」という言い回しまで知っていた(JJA 31.146)。1926年10月にパリでジョイスに会った佐藤健は福島市出身だった。“Sendai” (FW196.19)には仙台の意味もあるのかもしれないが、私には前後の文脈と結びつけて解釈出来ない。(日本の先人研究者たちは、この語は九州の「川内」川であると解釈しており、Roland McHugh もそのように *Annotations* に記している。) 伺った限りでは、日本ジョイス協会関係者が岩手で3人、仙台で2人が東日本大震災で被災した。首都圏でも地震被害は甚大と聞いたが、皆無事で何よりである。

数日前に金井嘉彦氏よりご恵送の『「ユリシーズ」の詩学』を読み終えて、震災前日、私は京都に着いた。本震の時刻には、私は大徳寺総見院で織田信長の墓所を詣でていた。夕方、木屋町三条の博多長浜ラーメンみよしのラジオを聞くまで全く震災に気がつかなかった。翌朝までにジョイス研究者を中心に100通以上の安否確認メールが届き、Facebookの書き込みもすごいことになっていた。私が京都に「避難」していたのが知れると、須川いずみ氏、真鍋晶子氏や道木一弘氏から避難所ご提供のお申し出をいただいた。そのうちに『ユリシーズ』読書会の楽しい会合があった。浅井学氏に昼食をご馳走になった。別れ際の「大変だろうけど、頑張れ！」の一言が忘れられない。

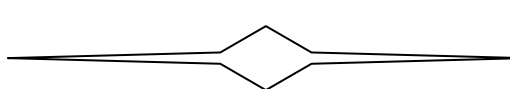
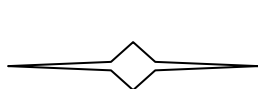
6月には第22回北米ジョイス学会がロサンゼルス郊外で開催、アメリカの友人たちから何度も誘われたが、週末補講などがあり、とても出席出来なかった。東アジアからは高麗大学 Seokmoo Choi 氏の “Joyce’s Anatomy of Ireland as a Partner in the British Empire” という発表のみだったようだ。

7月第35回IASIL学会がベルギーのルーヴェン・カトリック大学で開催された。ルーヴェンは1607年にアイリッシュ・コレッジが設立され、*Annals of the Four Masters* が編纂されるなど、古くからアイルランド研究拠点の一つである。4つの基調講演があったがジョイス関連はなく、発表論文数は僅か132本(内ジョイス関連10本、専門パネル2つ)であり、お世辞にも盛況とは言えなかった。日本人参加者は10人で内8人が発表した。他の東アジア諸国からは、中国0名、韓国1名、台湾からは女性のみ5名(内ジョイス論2)の参加者であった。道木一弘氏が “Belacqua’s Painful Case in *More Pricks Than Kicks*” という題でベケット論、小野瀬宗一郎氏が “Politics in the Graveyard: Post-Parnellite Dublin in James Joyce’s ‘Hades’”、伊東が “‘A Suave Philosophy’: Reconciling Religious Identities in Joyce’s Works” という題でジョイス論を発表した。台湾女性ジョイス研究者の発表が目立った。

Yi-Ling Yang 氏の“Languages in Collision? Translation Writing in *Ulysses* and *Rose, Rose, I Love You*”、Hsiu-Yuan Chen 氏の“‘No, That’s Noise’: The audio cannibalism in Joyce’s *Ulysses*”はそれぞれ面白かった。IASIL AGM でも東日本大震災が大きく取り上げられ、それに関して中尾まさみ会長の長文書簡を事務局の道木一弘氏が朗々と読み上げ、出席者の拍手喝采を受けていた。

10月には同志社大学でIASIL Japanの大会があった。Symposium 1: “Wounds and Cures in Irish Literature”では、身体表象論の坂内太氏が“Guilt and Theatrical Transformation in Joyce’s Writings”という題でスティーヴンとブルームを中心に登場人物たちの夢想劇中の身体的、心理学的変容を考察した。桃尾美佳氏は、“‘The Distorted Vision’: Exiles and Confinement in John Banville’s Novels”という題で、伝統的な語りを用いながらも多様なテーマを扱う現代アイルランド作家バンヴィルの作品中、特に主人公が語り手である場合にその視野が極度に狭められていることの意義を論じていた。翌朝の論文発表では、小野瀬宗一郎氏が、“A most Pertinent Question: ‘Aeolus’ and the Wyndham Controversy”で1903年のジョージ・ウインダムによる土地法への第7挿話の言及を当時の新聞報道などから考察した。

7月末帰国する前日、ふと思立って、オランダのマウリッツハイス美術館に出かけ、フェルメールの「真珠の耳飾りの少女」と「デルフトの眺望」などを鑑賞した。帰国後、宮田恭子氏の新刊『ルチア・ジョイスを求めて』を読むと、フロイントの『ジョイスとの三日間』では、1938年頃のジョイスのアパルトマンの写真(28頁)に「真珠の耳飾りの少女」の複製を確認出来、さらにバッジエンによれば、ジョイスはフェルメールを愛し、複製数枚を所有していたとあった(宮田 36-37頁)。震災からの復興を願い、「フェルメール展」が10月27日から宮城県美術館で開催したのは、被災地のジョイス研究者には何よりの贈り物である。来年7月には「真珠の耳飾りの少女」も東京都美術館にやってくるという。



事務局情報

住所変更をされてこの Newsletter が転送で届いた方は、お手数ですが右記事務局宛にお知らせください。(e-mail 可)



日本ジェームズ・ジョイス協会 事務局

〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町4-2

群馬大学教育学部

吉川信研究室内

メールアドレス: sean_jjsj_since08june(at)ybb.ne.jp

ゆうちょ銀行 口座番号: 記号 10430 番号 1854541

(名義 日本ジェームズ・ジョイス協会)